

St. Luke's International University Repository

Health (kenkou)-Concept and The Genki in the First-year Nursing Students.

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2007-12-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小澤, 道子, 香春, 知永, 横山, 美樹, 佐居, 由美 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10285/354

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



看護学生の考える「健康」と「元気」

小澤 道子¹⁾ 香春 知永²⁾ 横山 美樹³⁾
佐居 由美⁴⁾

要 旨

本調査は、「健康」と類義語である日常用語の「元気」という言葉に焦点を当て、入学したばかりの看護学生が、「健康」という言葉と「元気」という言葉をどのように使い分けているかを知ることが目的とした。

対象は、S看護大学1998年度入学生80人であり、1998年4月の初回講義時に現在の健康状態・生活の満足・元気度、注意している健康行動の有無、対象者の属性、自由記述を求めた健康観と元気観・看護観などから構成された質問紙法を実施した。自由記述された健康観と元気観の内容は、KJ法に準じてラベル化し、WHOの健康の定義の3側面を中心に分析した。なお、分析に際しては、1998年10月に同一方法で行ったW大人間科学部「看護学」選択学生102人のうち女子学生66人の結果と比較する手続きをとった。

その結果、次のことが示された。

- ① 対象者の平均年齢(20.5±4.3)、現在自覚する健康状態(まあ健康:76.2%)・元気度(まあ元気:77.5%)・生活の満足度(満足・やや満足:87.5%)は、W大学生と類似であった。
- ② 自覚する健康状態と元気度の一致率は、対象者:77.5%、W大:63.5%であり、これらの主観的健康状態に関する指標間の重なり度合いは約7割であった。
- ③ 「健康観」の内容一人平均ラベル2.0±0.93件(1~4)、「元気観」は1.8±1.04(1~5)であり、W大と近似の平均件数であった。
- ④ 「健康観」の記述側面は、身体面+精神面:70.9%・身体面:12.7%・精神面:2.5%であり、「元気観」は、精神面:53.2%・身体面+精神面:40.5%であった(P=0.0000)。内容は「健康観」が、「身体が正常・身体に病気がない」など身体面や疾病との関連があるのに対し、「元気観」は「意欲的・行動をおこすエネルギー・やる気」など精神面であり、「健康」は身体の側面、そして「元気」は精神の側面を強調していることが示された。
- ⑤ 対象学生とW大生の「健康観」と「元気観」の記述内容は類似し、本結果は、人間に関心や興味のある大学生集団の考えを示していると解釈できる。

以上、日常生活で使われている言葉は、現実の生活に密着し、生活実態に近い表現とその意味する内容を含んでいると考えれば、生活する人の健康現象に関しては、日常語で表現していく視点と国際的な共通語(専門用語)の視点の両面を大切にしていくことが示唆された。

キーワード

健康観, 元気観, 看護学生, 入学当初

I. はじめに

「健康」とは何かを問われると、この問に対する明確な答えは難しい。

WHOの健康の定義(1946年)は、人間の健康現象を対象とする学問や実践活動において、「健康」に関する論議の原点であり、定義に盛り込まれた考え方やその方

1) 聖路加看護大学 教授(基礎看護学)
2) 聖路加看護大学 助教授(基礎看護学)
3) 聖路加看護大学 講師(基礎看護学)
4) 聖路加看護大学 助手(基礎看護学)

向性は多くの人々や国々で支援と共感を得ている。

この「健康」の定義を専門用語とすると、一方で、一般の人々は、会話の中で「健康」という言葉を日常的に使っている。従って、例えば、「自分の健康を自分で守る」という言葉のやりとりにおいて「健康」という言葉を共通語にしていく取り組みは、専門職の大きな課題である。昨年、入学当初の看護学生の「健康観」を調査した結果¹⁾、多様な健康観が示され、日常生活で使う言葉を大事にしながらか専門用語としての「健康」の概念を理解していく重要性が示唆された。

さて、日本語の「健康」の言葉の由来について八木氏は²⁾、「明治のはじめの欧米の医療制度の調査からHealthを健康と訳語したという説もあるが、日本においては幕末(1837)に健康という言葉がすでに使われていた」、そして「貝原益軒の養生訓(1713)には『元気』とか『病なし』『痛みなくして安楽なるべし』などの表現はあるが『健康』の文字は見あたらない」と述べ、日本語の「健康」と「元気」の言葉が古くから存在していたことを報告している。

そこで本調査は、「健康」と類義語である日常用語の「元気」という言葉に焦点を当て、入学したばかりの看護学生が、「健康」という言葉と「元気」という言葉をどのように使い分けているかを知ることが目的とした。

このことは、日常生活で使われている言葉の意味する内容の検討から、複雑な健康現象を理解する試みでもある。

なお、対象とした看護学生は、入学当初であり、人の健康現象に関心や興味を持っているが看護学の勉強はこれからである。そこで対象者の特性を知るため、W大の人間科学部の「看護学」を選択した女子学生と比較する手続きをとった。

II. 対象と方法

対象は、S看護大学1998年度入学生80人である。このうち65人は学部1年生であり、15人は2年次学生となる学士編入生である。

方法は、質問紙法であり、1998年4月の初回講義時に調査の趣旨と成績評価や個人的なことは問題にしないことを伝え教室内で実施した。回収は全員からであった。質問紙の構成は、現在の健康状態・生活の満足・元気度、注意している健康行動の有無、対象者の属性、自由記述を求めた健康観と元気観・看護観などである。自由記述された健康観と元気観の内容分析は、KJ法に準じてラベル化し類型化した。

なお、分析に際しては、1998年10月に同一方法で行ったW大人間科学部「看護学」選択学生102人のうち女子

学生66人の結果を比較することによって検討した。

III. 結果

1. 対象者の背景

対象者の平均年齢は、 20.5 ± 4.3 (18~42) 歳であり、平均同胞数は、 2.4 ± 0.7 (1~5) 人、自宅からの通学者72.5%であった(表1)。W大は、平均年齢は、 20.3 ± 4.3 (18~24) 歳であり、平均同胞数は、 2.2 ± 0.7 (1~4) 人、自宅からの通学者39.1%であった。両学生の集団としての平均年齢は類似しているが、対象者の年齢幅は広く学士編入生の存在が反映していた。また、対象者の方に自宅通学生が多かった。なお、対象者の学部1年生と学士編入生については、平均年齢(学部1年生： 19.3 ± 3.5 、学士編入生： 25.3 ± 4.1)が異なっていたが、同胞数・家族形態・居住状況は類似であった。

表1 対象者

	S 大	W 大
人数	80	66
平均年齢	20.5 ± 4.3 (18~42)	20.3 ± 1.4 (18~24)

2. 現在の健康状態

対象者の現在の自覚的健康状態は、「非常に健康」11人(13.8%)、「まあ健康」61人(76.2%)、「あまり健康でない」8人(10.0%)であり、「健康でない」と答えた者はいなかった。また、同様に元気度を4段階で問うと、「非常に元気」11人(13.8%)、「まあ元気」62人(77.5%)、「あまり元気でない」6人(7.5%)

表2 対象者の現在の生活

		S大 n=80	W大 n=66
自覚的健康状態	非常に健康	13.8%	15.9%
	まあ健康	76.2	77.8
	あまり健康でない	10.0	6.3
	健康でない	0	0
元気度	非常に元気	13.8	9.4
	まあ元気	77.5	70.3
	あまり元気でない	7.5	15.6
	元気でない	1.2	4.7
生活の満足	満足	32.5	21.9
	やや満足	55.0	54.7
	やや不満	12.5	20.3
	不満	0	3.1

%), 「元気でない」と答えた者は1人であった。そして、現在の生活の満足度は、「満足」26人(32.5%), 「やや満足」44人(55.0%), 「やや不満」10人(12.5%)で、「不満」の者はいなかった。これらについて、W大の学生も類似の分布であった(表2)。

3. 自覚的健康状態と元気度の関係

自覚的健康状態と元気度の関係を知るため、一致率を算出した(表3)。その結果、一致率は、77.5%であり、残りは不一致であった。不一致のうち健康度よりも元気度の方の割合が高いとする者と、一方低いとする者の割合はそれぞれ同数の11.25%であった。W大学生は、一致率63.5%、不一致率36.5%であった。

表3 自覚的健康状態と元気度の関係

n=80				
健康度 元気度	非常に健康	まあ健康	あまり健康でない	健康でない
非常に元気	6	4	1	0
まあ元気	5	53	4	0
あまり元気でない	0	3	3	0
元気でない	0	1	0	0
一致率	$\frac{6+53+3}{80}$		77.5%	
不一致率	健康度>元気度 $\frac{5+3+1}{80}$		11.25%	
	健康度<元気度 $\frac{4+1+4}{80}$		11.25%	

表4 平均記述件数

	S大	W大
健康とは	2.0±0.93 (1~4)	1.9±1.15 (1~6)
元気とは	1.8±1.04 (1~5)	1.9±0.91 (1~6)

表5 「健康」についての上位記述内容

順位	S大 n=80		W大 n=66	
	内 容	件数 %	内 容	件数 %
1位	心と身体が健全・良好・充実	31 38.8	心と身体が健全・良好・充実	30 45.5
2位	身体が正常・通常	15 18.8	身体に病気がない	13 19.7
3位	心や身体に異常がない・病んでいない	12 15.0	日常生活を気持ち良く快適に過ごす	10 15.2
4	やる気に満ち意欲がある	7 8.8	身体が正常・通常	9 13.6
5	身体に病気がない	7 8.8	日常生活を行う上で不足がない	9 13.6
6	日常生活を気持ち良く快適に過ごす	7 8.8	よく眠れ、おいしく食べる	7 10.6
7	病気、怪我がなく、心が明るい	6 7.5	生活リズムが規則的	5 7.6
8	心と身体が密接に関わる	5 6.3	気持ちよく過ごす、快適	4 6.0

(%=件/学生)

(%=件/学生)

なお、両大学の一致・不一致率の間には統計的な差は認められなかった。

4. 記述ラベルからみた健康観

① 記述平均件数

「健康とは何ですか」の間に自由記述を求め、記述内容を意味のとれる最少単位の単語あるいはフレーズに分け、それをラベル化し量的に検討した。

健康については、ラベル総数155件で一人当たり平均件数2.0±0.93(1~4)であり、W大の平均件数1.9±1.15(1~6)であった(表4)。対象者とW大の結果は類似していた。

② 健康に対する記述内容

ラベルを記述内容毎にまとめ、多い順にその出現率をみると第1位は「心と身体が健全・良好・充実」(38.8%), ついで「身体が正常」(18.8%), 「心や身体に異常がない・病んでいない」(15%)などであった(表5)。同様にW大の結果は、第1位が「心と身体が健全・良好・充実」(45.5%), ついで「身体に病気がない」(19.7%), 「日常生活を気持ちよく快適に過ごすこと」(15.2%)であった。

③ 記述内容の側面

ラベル毎の記述内容は、WHOの健康の大憲章(1946)にある「健康の定義」の3つの側面すなわ

表6 「健康」の記述内容-側面別割合-

側 面	S大 n=80	W大 n=66
身体面	33 21.3	35 28.0
精神面	21 13.5	17 13.6
身体+精神	57 36.8	41 32.8
生活・人生	22 14.2	27 21.6
その他	22 14.2	5 4.0
計	155件 100.0%	125件 100.0%

P=0.024

表7 「元気」についての上位記述内容

順位	S 大 n=79		W 大 n=65			
	内 容	件数	%	内 容	件数	%
1位	意欲的・積極的行動	19	24.1	意欲的・積極的行動	12	18.5
2位	行動を起こすパワー, エネルギー	11	13.9	やる気みなぎる	11	16.9
3位	やる気みなぎる	9	11.4	活き活きしている, 活力がある	10	15.4
4	前向きな気持ち	8	10.1	心身が充実, 満足	9	13.8
5	はつらつしている	7	8.9	行動を起こすパワー, エネルギー	9	13.8
6	相手に好感与える	7	8.9	気持ち・気力	9	13.8
7	心身が充実, 満足	6	7.6	精神的なもの	6	9.2
8	身体に苦痛がなく前向きな姿勢	6	7.6	くよくよしない	5	7.7

(% = 件 / 学生)

(% = 件 / 学生)

表8 「元気」の記述内容-側面別割合-

側 面	S大 n=79	W大 n=65
身体面	4 2.7	4 3.4
精神面	82 56.2	85 72.0
身体+精神	28 19.2	16 13.6
生活	7 4.8	4 3.4
その他	25 17.1	9 7.6
計	146件 100.0%	118件 100.0%

P=0.0662

身体的側面(以下Pとする)・精神的側面(以下M)・社会的側面(以下S)に準じて類型化した。身体面の内容は、「身体が正常」「身体に病気がない」「よく眠れおいしく食べられる」などであり、精神面の内容は、「やる気に満ち意欲がある」「悩みや心配事に左右されずこちよい」「楽しいときに笑い悲しいときに泣けること」「悩みがない」など、そして社会面は「人と助け合う」などである。また、「日常生活を気持ちよく快適に過ごす」「日常生活を行う上で支障がない」「人生をおくる上で重要なこと」などは生活・人生に分類し、残りのどの分類にも当てはまらない「損なって初めて気づくもの」「何をするにも大事なもの」「人により基準が異なる」「自分しかわからない」などをその他とした。なお身体面+精神面というのは各々の側面が複合された内容である。その結果、身体面+精神面が36.8%、ついで身体面21.3%、生活・人生:14.2%、その他:14.2%、精神面:13.5%の順であった(表6)。W大と比較すると、対象者がW大より記述割合の多いものは、その他であり、逆に記述割合の少ないものは生活・人生であった(p=0.0241)。

5. 記述ラベルからみた元気観

① 記述平均件数

表9 記述側面から見た健康観と元気観-記述全体- n=79

健康観 元気観	身体面	精神面	身体+ 精神面	その他	計
身体面	0	0	0	0	0
精神面	6 (a)	2 (c)	27 (d)	7 (g)	42 (53.2)
身体+ 精神面	4 (b)	0	24 (e)	4 (h)	32 (40.5)
その他	0	0	5 (f)	0	5 (6.3)
計	10 (12.7)	2 (2.5)	56 (70.9)	11 (13.9)	79 (100.0%)

* (a) ~ (f) は、学生事例

同様に「元気とは何ですか」の記述内容は、ラベル総数146件で一人当たり平均件数1.8±1.04(1~5)であり、W大の平均件数は1.9±0.91(1~6)であった(表4)。

② 元気に対する記述内容

「元気」のラベルも内容毎にまとめ、その出現率をみると第1位は「意欲的・積極的行動のこと」(24.1%)について「行動を起こすパワー・エネルギー」(13.9%)、「やる気みなぎる」(11.4%)、以下「前向きな気持ち」「はつらつしている」などであった。W大は、第1位「意欲的・積極的行動」(18.5%)、ついで「やる気みなぎる」(16.9%)、「活き活きとしている・活力ある」(15.4%)、以下「行動を起こすパワー・エネルギー」「気持ち・気力」であった(表7)。上位項目は、対象学生とW大学生と類似していた。

③ 記述内容の側面

健康の側面と同様に「元気」の記述内容をWHO

表10 健康観と元気観の記述抜粋例

学生事例	健康観 →元気観	健康観	元気観
a	P→M	身体の各機能が劣っていない状態。	くよくよ考えこまず活発で明朗な様子。
b	P →P+M	食事による栄養のバランスと睡眠が充分にとれていて、体の機能が正常に活動している状態。また日常生活の営みが肉体的に負担に感じない状態。	肉体的に重要な問題がなく、行動する活力がみなぎっていること。“健康”に比べて精神的なPowerという面が強調されているイメージ。
c	M→M	自分に即して言えば、「安心感を与えてくれるもの」「励ましてくれるもの」である。根をつめて勉強や仕事などをする必要がある時には、「私は健康なのだからこの仕事をやり遂げられるはずだ」と思って取り組むことにしているし、実際に健康に対して心配のない状態においては、人間はExtra Powerを自分の中から引き出すことができると思う。	「元気ですか?」というのは、時候の挨拶と共に手紙の書き出し文などで、多様に使われている言葉ではあるが、心を込めて「元気?」と聞く時にはいつも、“相手のことに配慮の気持ちを持っている”という自分の感情を前面に出したいと思う。元気とはエネルギーに満ちた状態であり、さまざまな物事のいしずえとなる力だと思ふ。
d	P+M →M	心身共に快適に暮らせること。健康というと特に身体に病気がないというイメージがある。	生活が充実し、好奇心が強くなり、気持ちがポジティブになっている状態。 元気=笑顔というイメージを持ちます。
e	P+M →P+M	心が健康であることと、体が健康であることは密接に関わっていて、切っても切れないものだと思います。心においても、体においても何不自由なく、悩みや不満もなく生活できる、前向きに生活できることが健康なことだと思います。	健康であることに加えて、それ以上の活力があり、何でもできることが元気だと思います。意識しなくても、自然にがんばるぞという気になっている時が元気なのだと思います。
f	P+M →その他	身体の健康は今のその人にとって最高の状態であること。だから個人差があると思います。心の健康は、自己受容ができていることと、自立していること。ありのままの自分を受け入れられれば、ありのままの他人も受け入れられる。またいろいろな意味で、他人に依存することから脱することも必要だと思う。	元気とは、生命を楽しんでいる状態だと思う。自分で自分の道を選び取り、自分の人生に責任を持ち、毎日を満喫している時、それは元気と言える(反対に、人生を消耗している時は元気ではない)。
g	その他 →M	肉体的に病気または怪我がなく、精神的に「自分は幸せだ」と思える状態が良い健康状態です。健康は、その人の人生そのものを左右する、最も重大で重要なファクターの一つです。	能動的に行動しようとする意欲及びエネルギーです。
h	P+M+S →その他	単に病気であるというのではなく、身体的・精神的・社会的・宗教的に良好な状態であること。たとえ、病気やけがを持っていても、今のその人が意欲を持って、活き活きと生活できていれば、またそれも健康であると思う。	精神的に良好で前向きな状態。たとえ病気など健康人でなくとも、その人の中で少しでも前向きで、意欲的に考える姿勢があれば、それは“元気がある”ということだと思う。

(P: 身体面 M: 精神面 S: 社会面)

の側面に準じて分類した。身体面の内容は、「体力的によい状態」「疲れていない」などであり、精神面の内容は、「意欲的・積極的行動をとれる状態」「行動をおこすパワー・エネルギー」「やる気がみなぎる」「前向きな気持ち」「気力」「活力」など、そして生活面は「快適に生活」「前向きに考えて生活する」であり、その他の内容は、「人に与えるもの」「健康と元気は密接な関係がある」「元気ですかは手紙や時候の挨拶」などであった。なお身体面+精神面というのは各々の側面が複合された内容である。その結果、精神面が56.2%、ついで身体面+精神面が19.2%、その他：17.1%、生活：4.8%、身体面：2.7%の順であった(表8)。W大も同様な順で精神面72.0%、ついで身体面+精神面が13.6%、その他7.6%と、W大の方が対象学生より精神面の占める割合が多い傾向であった($p=0.0662$)。

6. 健康観と元気観の個別の比較

個々の学生の記述全体に注目し、詳細に記述表現や内容側面を検討した。その結果、健康観も元気観も一人一人異なっていた。そして、個人毎に健康観と元気観の記述表現を比較すると、同じ文章表現のものは皆無であった。次いで、記述側面毎に比較すると(表9)、健康観は、身体面+精神面にふれている者が56人(70.9%)であり、身体面のみが10人(12.7%)、精神面のみふれている者が2人(2.5%)、そして社会的面のみの者はいなかった。一方、元気観は、精神面の内容のみが42人(53.2%)と過半数を占め、ついで身体面+精神面が40.5%であった。統計的には、健康観と元気観の記述側面割合の間には有意な差があった($P=0.0000$)。すなわち、健康観には身体面のみが約1割強いたが、元気観には身体面のみが皆無であり、精神面を含む内容が大多数を占めていた。そして、健康観と元気観の記述側面の一致する者は、26人(2+24/79, 32.9%)であり、残り53人(67.1%)は不一致であった。その不一致の側面を検討すると元気観は、健康観の側面に精神面の側面が付加されていた。表10は、健康観と元気観の側面の組み合わせ別(表9参照)に学生(a)から(f)の各一事例をとりだし、記述文例として示した。(c)事例(e)事例のように健康観と元気観が同じ側面で分類されていてもその含める内容は異なっていた。

IV. 考察

1. 自覚する健康状態と元気度の関係

対象学生の現在の自覚する健康状態と元気度の関係

をみると一致率77.5%、不一致率22.5%、W大の学生も一致率63.5%であり、主観的な意識としての健康状態と元気度は、重なって意識されていること、そしてその重なり度合いが7割前後であることが示された。これまでの大学生の調査³⁾⁴⁾において、自覚的健康状態と生活の満足が関連していることから考えれば、対象学生の一致率77.5%という重なり度合いの高い背景には、希望する大学に入学したばかりで現在の生活に満足している者87.5%という状況が反映されているとも解釈できる。今後、自覚的健康状態と元気度という主観的健康状態に関する指標間の重なり部分とその重なり度合いなどについて対象者の健康状態レベルや年代などを考慮して追究していきたい課題である。

2. 健康観と元気観

① 入学当初の看護学生の「健康観」・「元気観」

自由記述で求めた健康観と元気観それぞれについて、KJ法に準じた内容分析と学生個々の記述全体の比較を行ったところ、単科大学の看護学専攻の対象学生と総合大学の人間科学部専攻のW大学生の間にはほぼ類似した結果が示された。このことは、対象学生は、看護学生とはいえ、入学当初であり、同年齢で人間に関心や興味のある大学生集団の「健康」や「元気」に対する見方や考え方であると解釈できる。今後、対象学生が、看護学生として専門の教育を受けていく中で「健康観」・「元気観」がどのように変化していくかは興味ある追究課題である。

② 「健康観」・「元気観」と各々の強調

言葉、とくに日常用いている言葉は、現実の生活に密着し、生活の実態に近い表現とその意味する内容を含んでいると考える。

本調査では、「健康」と「元気」という日常用語の構造を知る試みとして、WHOの健康の定義の側面(身体的・精神的・社会的)を中心に内容分析をおこなった。その結果、個々の学生の「健康観」と「元気観」は、身体的側面のみから身体面と精神面を含める者など側面の幅が多様で個人差のあることが示された。また、側面の占める割合を記述ラベル件数や記述全体などから量的に検討すると、側面の幅は「健康観」も「元気観」もどの側面にも網羅されていたが、側面の割合は異なっていた。すなわち、「健康」と「元気」は、概念の幅は共通であるが、強調の置き方に違いのあることが推察された。

すなわち、「健康観」には、「身体が正常・身体に病気がない・ケガがない」など身体面や疾病との関連があるのに対し、「元気観」は身体面や疾病との関連性は少なく「意欲的・積極的行動・行動をおこ

すパワー・エネルギー・やる気・活力」など精神面のみが過半数以上を占め、どちらかという、「健康観」は身体の側面、そして「元気観」は精神の側面に強調がおかれていると解釈できる。このことは、昨年度の「健康観」の結果¹⁾と類似し、また村井等⁵⁾の高校生を対象にした「健康」と「元気」の結果と一致していた。従って、個々の「健康観」・「元気観」は、これまで育った環境や生活経験の違いで異なるが、しかし一方、その育つ環境や生活経験などを規定する共有の社会・文化・歴史などの影響を受け、一人ひとりの違いを超えた共通性のあることも推察できる。

池上は⁶⁾、「中国医学では『元気』とは、原初的な生命エネルギーであり、父母から受け継いだものである。」とのべ、また白山は⁷⁾「中国の考え方では、『気』は経路を流れる生体エネルギーであり、物質的な性質も有している。中国人にとって『気』は実在するものであり、人によってそれを感じたり見たりすることができるといわれている。『気』の流れが停滞したり乱れたりすると健康を害し、いわゆる病気になると考えられている。日本では少し異なり、『気』は人間の精神をさすことが多いようである。」と述べている。また「WHOの定義、すなわち、Healthの語源は、アングロサクソン語のhal、続いて現代英語のwholeに転じ全体や調和や強さを意味している⁸⁾」など「健康」に関する言葉の概念は、国によりさまざまである。

少なくとも生活する人の健康現象に関しては、その国の日常語、日本であれば日本語で表現していく視点と、国を超えて国際的な共通語の視点の両面を大切にしていきたいと考える。

V. おわりに

本調査は、「健康」と類義語である日常用語の「元気」という言葉に焦点を当て、入学したばかりの看護学生80人を対象に質問紙法を用いて、「健康」という言葉と「元気」という言葉をどのように使い分けているかを知ることが目的とした。分析には、対象者の特性を知るためW大人間科学部「看護学」選択の女子学生66人と比較する方法をとった。

自由記述で求めた健康観と元気観の内容は、KJ法に準じてWHOの健康の定義の3側面を中心に分析した。その結果、対象者とW大学生の背景と「健康観」・「元気

観」の内容は、類似していた。すなわち、「健康」と「元気」の概念には、身体面・精神面・社会面などのどの側面も含め側面の幅は共通であるが、「健康」は身体的側面、「元気」は精神的側面とその強調の置き方に違いのあることが示された。そして、この日常の言葉に含まれる概念は、一人ひとりの環境や生活により異なるが、個人の生活を規定する共有の社会・文化・歴史の影響を受け、個人差を超えた共通性のあることが推察された。

今後、生活する人の健康現象に関しては、日本語の日常語で表現していく視点と国際的な共通語の視点の両面を大切にしていきたいことが示唆された。

引用文献

- 1) 小澤道子 香春知永 横山美樹 佐居由美：看護学生の入学当初の健康観とそれに関与する要因 聖路加看護大学紀要(24) 14~20 1998
- 2) 八木 保：用語「健康」の由来とその流布について 第62回日本民族衛生学会総会講演集 46~47 1997
- 3) 池田紀子 小澤道子 クック範子 上田礼子：生涯発達の視点から見たあそびの意義—青年期女性の「たのしみ」経験と自己概念 第59回日本民族衛生学会総会講演集 p114~115 1994
- 4) 小澤道子 上田礼子 池田紀子 クック範子：青年男女の子ども時代のたのしみ経験 第42回日本学校保健学会講演集 p285 1995
- 5) 村井文枝 岩田裕子 田代順子 岩瀬信夫 小澤道子：高校生の考える「健康」と「元気」 第17回日本思春期学会 1998
- 6) 池上正治：「気」で観る人体 講談社現代新書 p20 1992
- 7) 白山正人：「気」と意識・健康法 気の世界 東京大学公開講座(50) 東京大学出版 p276 1990
- 8) 岩田和夫：Ill healthという言葉をめぐる 日本医事新報 No.3850 p42 1998

参考文献

- ・秋山房雄：休養と和楽 保健の科学(38) 29~94 1996
- ・貝原益軒(伊藤友信訳)：養生訓 講談社 1982
- ・園田恭一 川田智恵子：健康観の転換 東京大学出版 1995
- ・S・スピッカー T・エンゲルハート(石渡隆司 他訳)：新しい医療観を求めて 時空出版 1992

Health (Kenkou)-Concept and The Genki in the First-year Nursing Students

Michiko Ozawa, Chie Kaharu, Miki Yokoyama, Yumi Sakyo

Abstract

Health (Kenkou)-concept and The Genki are similiary used in Japanese. The purposes of this study was to know the Health (Kenkou)-concepts and the Genki of the first-year nursing students.

In April 1998, we conducted a questionnaire on 80 first-year nursing students in the S College of Nursing.

Health (Kenkou)-concepts and the Genki were questioned by open type. We investigated them by health definition of WHO: physical, mental and social points of view, and descriptive expression. We analysed the results in comparison with those of 66 students of the W University who major in Human Science.

The findings were as follows:

- ① Both subjects have similar backgrounds.
- ② The subjects have some descriptions for the Health (Kenkou)-concepts and the Genki in common.
- ③ The Health(Kenkou)-concepts are related to physical condition and disease, and the Genki depends on mental condition.

It is important to develop the Health-Concepts for Nursing students to ask and ponder own definition by common words.

Key words:

Health (Kenkou)-Concept, The Genki, Nursing Students, Freshman
